

Title	久米榮左衛門翁(岡田唯吉編)
Sub Title	
Author	武田, 勝藏(Takeda, Katsuzo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1928
Jtitle	史学 Vol.7, No.3 (1928. 11) ,p.147(459)- 147(459)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19281100-0147">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19281100-0147</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 久米榮左衛門翁(岡田唯吉編)

讚岐の阪出と云へば、直に鹽田を想起し、その產出量は本邦第一で、この開發者こそは實に同國の久米榮左衛門翁である。本書は翁の小傳で、次に、この偉人の隠れたる功績に敬意を表するため、本書を要約記述する。

翁は安永九年同國大川郡相生村に生れ、名を通賢と稱し、父祖は舵師と農とを兼業として居つた。幼より伶俐にして發明心に富み、七歳の折時計を修繕して人を驚かしたと傳へ、十九歳の時上阪して天文學者間重富の門に入つて麻田流の數理天文を學び、二十三歳、父の訃に遭つて歸郷し次いで文化三年二十七歳伊能忠敏の同藩測量に先ち命によりて藩内を實測し翌四年に至り、當時北門の警報類りに聞ゆるを以て「戰船積覽」を奉る、同書は翁の學びし海軍流の一なる「全流」を基礎として横暴極まる露に對する攻防法を論述し、且つこれに適す兵船等を考察せしものである。同一年頃より銃砲の製作に努力し、其考案にかかる遺品十數種中には、今猶ほ専門家の嘆賞するもの多く、文政六年高松の在、郷東に於てその實演を藩主の一覽に供したといふ。

當時、同藩は財政困難に窮せしにより藩主頼恕は其の挽回策を講ぜしめしを以て、翁は藩の行政財政の大改革案を獻じ、その中用ひられしものゝ一は即ち、阪出鹽田開發策で、文政九年に着手し同十二年八月竣工し、其工費は大部分私財を以て充て、九月藩主は之れを嘉賞して阪出鹽田碑を建設し、永世に顯彰した。爾後鹽業は日月に發達し、該鹽田は現に久米式鹽田と稱し、全國の模

範と推賞せられて居る。

翁は又、伊豫別子銅山の委嘱に因りて、その大漏外の防寒工事を完成し、且つ採鑛にも改善を加へ、遠州新居港の切開並に淀川の改修工事の設計をなし、又水田水揚器械を發明して「養老の池」と稱し、その模型を遠く江戸の淺草花屋敷に持出して用途を宣傳した。晩年(天保十一年)藩主に發明のドンドロ應用の火砲諸器を献じ、又大成置銘を伴つて西洋銃砲の沿革より自分の發明にかかる武器製作の主義方針を詳述し翌十二年歿す、年六十二。

大正十三年如上の功を追賞せられて、從五位を贈らる。翁の靈は、天恩に感激し永世に阪出の鹽田の發達を守護せらるることであらう。

終に、本書の編著、岡田氏は郷土研究家として令名高く、現に同地鎌田共齊主事の職にありて地方文化に貢献せられつゝある。

(昭和三、七、十六夜、武田勝城)

## 日蓮聖人傳十講(山川智滿著)

鎌倉時代に於ける諸宗のうち、心ゆくばかり男性的にして其の信仰の熱烈なるは日蓮聖人の法華宗であつて、念佛無間、禪天更、眞言亡國、律國賊と揚言して、既て是等の諸宗を排斥し去り、釋尊と法華經とのみを中心とする新佛教を唱へた日蓮の出現は、たしかに佛教史上の一偉業である。日蓮の教義こそは、當時の凡ゆる宗派を統一したるものにして、世界的宗教としての資格を完全に備具したる佛教なるが故に、すべからく聖人の精神を以て、將